

序

分子生物学が大変な勢いで成長した理由は、どの領域の研究者も基本的手技として分子生物学的アプローチが必要となっているからにほかなりません。とりわけPCR技術の普及は目覚ましいものがあり、どの分野の研究者も必ず利用する手段となっています。

『PCR実験なるほどQ&A』の企画が寄せられたのは昨年の春のことでした。一緒に多数の全国からの質問が付いていました。このシリーズの本は、私たちも便利に利用していますが、なぜこの種の本が大学院生によく利用されるのか疑問に思っていました。その答えは、身近なところにありました。最近の大学院生は、知らないと思われるのがいやで他人に聞こうとせず、わからぬまま実験を始め失敗します。実験内容を尋ねてみると、ここは間違えないであろうと思われるところで転けています。そんな大学院生には、このような本が必要なのかなと思うようになりました。どこでも競争社会となっしまい、うまくできた仕方を他人に知らせない傾向にあります。研究はチームプレーなので、少なくとも教室内では研究手技を共有してほしいものです。この本では、大学院生が先輩に気楽に質問する感覚の質問が並んでいて、その質問に「こうすれば簡単にできるさ」といった感覚で答えています。したがって、専門家の方が見たら背景となる解説がない、もっと多くのオプションがあるのにと、最も簡単な仕方しか書いてないと言われるかもしれませんが、この知識があるだけで与えられたテーマの中でPCR実験をする際、随分スムーズに事が運ぶと思います。大学院生やあまりPCRに馴染みのない領域の研究者が気楽に読んで自分の実験にすぐ取り入れられたと実感していただければ幸いに思います。

私たちの教室では行ったことがない実験手技では、それぞれの専門の先生方にご協力いただき、幅広い領域の研究者にも対応できるような書籍になったと思っています。お忙しい時期に快くお引き受けいただき参加していただいた先生方に、この場を借りてお礼申し上げます。さらに、この編集、制作に奮闘された羊土社編集部の皆様に心より感謝いたします。

2011年初夏

谷口武利